

# 「完璧」を目指す選択と評価のはざままで

—専業主婦の母親の子育て観を中心に—

## Between the Choice and the Evaluation for “Perfection”: Parenting Outlook of Housewives

吉本 文子<sup>1)</sup>

Fumiko YOSHIMOTO

### 概要

本稿は、「完璧」を求めるミドルクラスの母親の子育て観・その背景について、実態調査をもとに考察したものである。調査方法は、幼稚園・幼児教室に子どもを通わせている母親へのアンケート調査とインタビュー調査である。

「完璧」を求める母親は、目の前の子どもの姿に立脚した子育ての目標ではなく、外部にある目標から選択し、それに向かって邁進している。そして母親自身、子育ての評価を自分への評価に重ねている。母親は、他者を排除し、自分の世界に閉じこもり、不安を抱えている。その不安を回避するために「完璧」に向かっている。このような母親の行動には母親の社会経験が影響している。そして自らのキャリアを中断していることに、母親自身が葛藤していることを示した。

先行研究キーワード：「完璧」、選択、評価、ミドルクラス、子育て観

### Abstract

This examination is about the parenting outlook and the background of the middle-class housewives who are seeking for “perfection”, and which is based on the survey. Research methods are questionnaire and interviews to mothers who let their children go to kindergarten or preschool.

Mothers who are seeking for “perfection” set up the goal by the outside source without considering their children’s identity. And mothers regard the evaluation to their child care as the equal of the evaluation to themselves. Mothers exclude others, close themselves off, and facing concern. They are seeking for “perfection” to avoid their concern. Their behavior is affected by their social experience. This survey-results show that mothers are suffering mental conflict which is caused by breaking in their career.

**Keywords:** “perfection”, choice, evaluation, middle-class, parenting

---

<sup>1)</sup> 東京成徳大学 子ども学部・共栄大学 教育学部 (非常勤)

## はじめに

現代の子育ては、地域社会の崩壊に伴い、親の意識や価値観の比重が高まり、親の意識や価値観によってそのありようが規定され、多様化する傾向にある。また、教育に関しては親が選択する余地が大きく、市場化との関連も進行している。ペアレントクラシーによる親の「資本と意欲」に基づく個人的な「選択」が育児や教育の戦略に影響を及ぼしている。そして「格差」や家族の「個人化」を促し、家族の閉塞感が強まっている(天童陸子 2004, 耳塚寛明 2013, 荊谷剛彦 2012)。

また、子育て不安の原因の一つとして、母親の孤立は以前から指摘されている。その原因として、地域社会の崩壊や核家族化、少子化があげられている。しかし、現代においては、情報社会・消費社会等の社会の問題や社会が求めている能力と子育てに必要な能力の乖離等、さまざまな問題が絡み合い存在している(汐見稔幸 2008)。

その中で、近年、子育てに関して大きく取りあげられ注目を集めている課題は、子どもの貧困や虐待の問題である。いわゆる経済的・文化的に困難な層の問題として語られ、いわゆるミドルクラスとの「格差」が問題にされている(耳塚 2013, 荊谷 2012 等)。その一方で、そうではない層の子育てについて問題化される場面は、それほど多くないのではないだろうか。なぜなら、これらの層は、経済的にも一定の余裕があり、教育達成の度合をはかるわかりやすい指標である学歴の取得において、いわゆる「問題」がないからである。そのため、その子育ての方法や教育に関する思考や行動が少々極端であったとしても、親個人の自己責任の範囲であると考えられている。何らかの課題があるという視点をもって実態を解明しようとするアプローチが少ないのではないだろうか。「格差」社会における教育論議から取りこぼされてしまっている、いわゆるミドルクラスの子育てには、切羽詰まった課題はないのだろうか。

このような課題意識にもとづき、本稿では、母親たちの子育て行動に対する志向の背景、またそこから生じる不安、その原因について実態調査をもとに考察していく。第1節では幼稚園児をもつ母親の課題について先行研究から検討する。第2節では、本研究のアンケート調査、インタビュー調査の対象の概要を述べる。第3節は、インタビュー調査の語りから特徴的な2つの家族を選び、その母親の成育歴、夫との関係、子育て観等を示す。第4節では、現代の幼稚園児をもつ専業主婦の問題となる子育て行動について示した。第5節では、第4節の結果からその原因、背景を考察する。

## 1. 先行研究の検討

## 1.1 母親の子育て行動の特徴

1990年以降、「ポスト近代社会型能力」が家庭における親子の関係の質的なあり方に大きく影響を及ぼすようになった(天童 2016)。親子のコミュニケーションの豊富さや信頼関係が子どもの精神に大きく影響し、「母親の重要化」(本田由紀 2008)が強調された。母親の子育ての中身は変化し、広範囲かつ高密度なものが要請されるようになった。また、父親が長時間労働に従事していたため、家庭においては子どもの教育責任を母親が一手に担う状況であった。

広田照幸(1999)は、こうした母親の子育てのあり方を「『人格も学力も』という全方位型の教育関心」をもつ「パーフェクト・マザー」への志向として述べている。高度成長以降、社会全体に広がった「教育する家族」は、高学歴化や社会の情報化に伴い、育児のノウハウを容易に手に入れることができるようになった。「少ない子どもを大事に育てる」親の志向は、「人格も学力も」という全方位型の教育関心へと変化したという。そして多くの母親が、パーフェクト・チャイルドを作り上げるパーフェクト・マザーを目指すようになった。具体的な行動としては、宿題のさせ方・上履きの洗い方に始まり、会話の仕方や居間での物の配置に至るまでさまざまな事柄に配慮を砕く。甘やかしすぎず放任しすぎない微妙な親子関係を組み立てるこ

とによって子どもの「人格形成」をリードするパーフェクトな母親像である。それが理想的なモデルとして提示され、それに向けて努力することへの圧力が、現代日本で子どもをもつ女性を幅広く覆い始めているという。しかし、すべての母親が「パーフェクト・マザー」になる道を選択したのではなく、母親の階層や家庭の諸条件により、経済的にも精神的にも子どもに関心に向けるエネルギーがなく、感化されない母親もいた。しかし、その思考は広範囲の母親に認識され、影響を与えたと広田は指摘している。

また、本田（2008）は質問紙調査のデータをもとに、母親の子育てについての語りを「きっちり」した子育てを目指す語りと「のびのび」した子育てを目指す語りとに大別している。「きっちり」した子育ては、勉強や生活習慣を子どもに厳格に求める母親の傾向であり、「のびのび」した子育ては、子どもの遊びや体験、希望や意見の表明を重視する子育てを表している。親の学歴が高く経済的なゆとりがあり、母親の時間的余裕があるような、いわゆる社会階層の高い家庭ほど、「きっちり」した子育てに力を入れている傾向がある。しかし、分析結果から、そのような家庭は「きっちり」した子育てに力を入れていると同時に「のびのび」とした子育ても追求している傾向があるという。総じて、子育ての内容は「きっちり」であれ、「のびのび」であれ家庭の学歴という文化資本や家庭の潤沢な経済資本に大きく影響されている。広田のいう全方位型の子育て観が反映されている。

広田・本田は、現代における母親の子育て行動の特徴を述べている。階層の高い家庭では、全方位型の「パーフェクト・マザー」としての行動を目指し、同様に本田のいう「きっちり」した子育て、「のびのび」した子育ての両方に力を入れ、「ポスト近代社会型能力」を身に付けるための子育て行動をとっていた。しかし、その表現は曖昧であり、このような社会的な背景のなかで、なぜ「パーフェクト・マザー」の道を選択するのかという母親の内面的な心情についての言及はなされていない。

しかし、なぜ母親はこれほどまでに子育てに熱心に取り組むようになったのだろうか。その理由の一つとして、近年、母親の子育て行動の要因に、子どもを自身の「代理競争」の道具にしているという指摘がある。細辻恵子（2005）は、「子育てに『個のエゴイズム』の次元が加わると、母親の欲望は、子どもを競争の道具にしてしまう」と述べている。母親自身が自分の人生の目的を見出せず、それを隠蔽するために、「いい子」育てに邁進する。その隠蔽が「いい子」育てを挫折させる。道具にされた子どもに自由がないことに母親自身が気付かなければ、「いい子」育てはなくなるといえる。

このように現代のミドルクラスの母親の子育てはさまざまな矛盾と困難を抱え、「いい子」育ての状況がヒートアップしている状況に陥っているのではないかと。「いい子」育ての思いにペアレントクラシーのイデオロギーが加わることにより、なお一層、母親の選択の余地が広がり、子育てへの意欲が強化されている。

## 1.2 ミドルクラスの問題

先に述べたような現代の子育て状況をめぐる問題は、ミドルクラスに集中的に表れている。その背景には、ミドルクラスのもつ社会的な背景が関連している。では、具体的に「ミドルクラス」の問題とはどのような課題なのであろうか。

渋谷望（2010）は格差問題を「ミドルクラス社会」の問題と位置づけ、ブルデュー<sup>1)</sup>を援用し「プチブル階級」について検討を行っている。渋谷によると、ブルデューはプチブル階級（ミドルクラス）の人々をブルジョア階級（上層階級、支配階級）の一員ではないにもかかわらずブルジョア階級になりたがり、そのための努力を惜しまないという。ブルジョアは正統な文化の所有者であり、「本物」の文化を知っているが、プチブルは何が「本物」かを知らず、それにもかかわらず「本物」に対して過剰な敬意を払い、「本物」の文化を手にすることができれば、自分自身も「本物」になれると考えている。また、彼らは何が「本物」の文化であるのかを知ることができないので、常に不安に苛まれているという。正統文化の所有者であるブルジョア階級のエートスは「ゆとりのエートス」である。ブルジョアにとって自己と世界はあるがままの姿でかまわない。彼らの今ある姿はあるべき姿と一致し、そこから自由な態度や屈託のなさが生まれる。それは自己への自信の表れである。これに対しプチブルにはそのようなゆとりや余裕はない。彼らは上昇しようとする。

というのは彼らにとって「今ある姿」は仮の姿であり、「あるべき姿」ではないからだ。彼らの特徴づけるのはこの不一致であり、自己分裂である。その結果、ミドルクラスに矛盾が集中するが、この点に目が向けられていないというのが渋谷の主張である。

近年、社会問題として大きく取りざたされている格差であるが、その大部分は子どもの貧困等、低階層の問題に焦点が当てられている。相対的貧困率の上昇等、子どもの貧困や低階層の問題については、明確な指標があることから言及されやすい。しかし、ミドルクラスが抱えている課題は、価値観の多様化の中、親の選択によってなされたことであり、それを尊重する必要があることから問題化しづらい面がある。上昇志向の強いミドルクラスの家庭において、子育てもその志向の一部となっている。その結果、子育てに矛盾が生じていることが指摘されている（押川 2017, 三好 1999 等）。渋谷が指摘するようなミドルクラスの不安が及ぼす子育ての問題を明らかにし、具体的に問題状況を把握することが求められている。

### 1.3 子育てに必要な母親としての能力

このようなミドルクラスの子育てにおける問題は階層の性格によってもたらされる不安だけに起因するものではない。原田正文（2007）は、母親の子育て志向は、日本社会全体のマニュアル指向、完璧志向が反映しているという。何か事故が起こるとマニュアルの存在が問題となり、「マニュアルどおりにしていたのか」と追及される。また、完璧を要求し、失敗を許さない雰囲気が強まっているという。子育てにはただ一つの正解はなく、当然マニュアルもない。しかし、母親たちは子育てのマニュアルを求め、自分の価値観に合うマニュアルを見出し、そのマニュアルどおりに「完璧」を目指し、子育てをしているのではないだろうか。このようなマニュアル指向の現代社会に適応した能力をもつ母親は、逆に子育てには適さない部分を持ち合わせているように思えるという。

原田は、質問紙調査の結果から、「行動を完了しようとする意志」が強いことが「子育て困難性」を高めていると述べている。「行動を完了しようとする意志」が強い母親、「行動生起における自信」がある母親は「情緒的サポート」を受けにくく、孤立する傾向があることも判明しているという。このような「自己効力感が高い」という母親の特性は、育児場面では困難な状況を招いているだけではなく、子どもの発達に悪影響を与えているということを明らかにしている。「行動完了の意志」が強く、「行動生起での自信」が強い母親は、学齢期や会社社会では有能な母親である。ところが、学齢期や会社社会では有能でよくできると言われていた母親が、子育てでは困難を抱えているという。言いかえると、「現代日本社会が育てようとしている人材はあるいは、有能と評価している人材は、子育てには不向きな人格である」（原田 2007:117）という。高学歴で社会で懸命に働き、その結果、自己有能感、自己効力感を高く持っている母親は多い。しかし、その能力と子育てに必要な能力は異なる能力であることを原田は指摘している。

また、高橋和己（2016）は、母性と父性の役割の違いを指摘している。子どもはまず母親機能である安心と信頼を獲得していく。そして次に、父性から「がんばり方」を学ぶ。母性無しの父性は、子どもの不安を強化してしまう。社会で求められる力は、高橋のいう父性機能の「がんばり方」である。女性の社会進出が進む昨今、母親は父親機能を社会で身に付け、子育てにも応用している。母親が母性を通じて子どもに安心と信頼を獲得させる前に、社会で得た父性の「がんばる力」を獲得させようとする傾向があるのではないだろうか。また、父親役割と母親役割が同一のものとなっているために、子どもの不安は一層強まっている。このように子育てに関する能力は母性と父性では質・機能の違いがある。母親が社会で得た能力をそのまま子育てに応用することによって問題が生じると考えられる。

また、内田樹（2014）は父親と母親の育児戦略が違い、双方の言い分、期待がずれていると、子どもにも「立つ瀬」がある。両親の価値観が異なることにより、子どもは「息の付ける隙間」があり、その隙間によって健全に育つことができたのであると述べている。しかし、現代では、先に述べたように両親共に育児に参加することで、母親が父親と同じ価値観で子どもにせまっているのではないだろうか。そのために親の子育て意識は一枚岩となり子どもの「息の付ける隙間」をなくしている。

本稿における「完璧」な子育てを目指す母親の子育て行動の一つの背景に、資本主義社会の価値観が家庭に持ち込まれることがある。このことにより、父親と母親が同一の価値観で子育てに対峙し「勝てる」人間をつくらうとしているのではないだろうか。

#### 1.4 本稿の課題と論文構成

現代の日本社会が育てようとしている人材、あるいは有能と評価している人材は、「子育てには不向きな人格」(原田 2007)である。そして、母性による「安心と信頼」が育まれないまま、父性機能である「がんばり方」を先行して身に付けようとしている。それによって子どもが不安定になる(高橋 2016)。これらはいずれも、資本主義社会の価値観を家庭に持ち込むことであり、そのことによって子育てに矛盾が生じていると思われる。

しかし、なぜ資本主義社会の構造が子育てに持ち込まれることによって現実的な問題を引き起こすのだろうか。またそれは、母親の子育て行動にどのように反映しているのだろうか。本稿では、このような課題意識にもとづき、「完璧」な子育てを目指す母親の具体的な行動の「選択」、その「選択」がもたらす「評価」の内容と資本社会の構造との関連について実態調査をもとに考察していく。

## 2. 本研究の対象と方法

### 2.1 調査の対象と方法

本研究の対象者は、幼稚園と幼児教室に子どもを通わせている専業主婦である。子どもを幼稚園に通わせている母親は専業主婦が多く<sup>2)</sup>、家庭で子育てに専念している傾向にある。幼稚園に通わせているということは、経済資本がある程度確保され、母親が就業しなくとも生活が可能である家庭であるということを示している。その性格からいわゆる「ミドルクラス」の母親が多いといえる。本稿では、経済的な不安がある程度なく、子育てに専念し子育てを「生きがい」としているミドルクラスの母親が、それゆえに抱えている問題について考察することを主たる目的とすることから、対象者を子どもを幼稚園と幼児教室に通わせている母親とした。

また、本稿において扱うデータは、次の2つの調査から得られたものである。一つは、2017年に実施した幼児期の子どもをもつ母親を対象としたアンケート調査であり、もう一つは幼児期の子どもをもつ母親を対象にしたインタビュー調査である<sup>3)</sup>。アンケート調査においては、母親の育児行動が表面化している内容(おけいごと等の利用や費用、幼稚園を選んだ理由等)が、顕在化されていない育児意識とどのように結びついているかを調査した。インタビュー調査においては、その内容がどのように育児行動に影響を及ぼしているのか、その背景を含めて質問し、母親の内化された子育てに対する価値基準や子育てに対する願望等を調査することを目的とした。

### 2.2 アンケート調査の概要

アンケート調査<sup>4)</sup>では、各幼稚園・幼児教室を通じて園児に調査票を配布し、母親または父親に記入を依頼する留置法を採用した。実施期間は2017年2月から4月である。アンケート調査を実施した幼稚園は、東京都、神奈川県に位置している。園の形態は公立幼稚園1園、私立幼稚園6園、幼児教室1教室である。幼稚園の園児数は、50人の小規模な園から400人を超す大規模な園までさまざまである。アンケート調査の有効回収票数は672票、回収率は58.6%である。アンケート調査の対象園の概要を表1に示す。

表1 アンケート調査対象園の概要

グループ	所在地	設置主体	園児数	保育料(初年度) 保育料(2,3年度)
A	A1 幼児教室 (東)23区	個人	20人	
B	B1 幼稚園 (神)川崎市	私立	146人	869,000円* <sup>1</sup> 496,600円
B	B2 幼稚園 (東)23区	私立	160人	880,800円* <sup>1</sup> 643,040円
C	C1 幼稚園 (東)多摩	私立	433人	594,500円 412,200円
C	C2 幼稚園 (東)多摩	私立	134人	392,000円 312,000円
C	C3 幼稚園 (東)多摩	私立	200人	433,400円 338,400円
D	D1 幼稚園 (東)23区	公立	53人	92,700円* <sup>2</sup> 91,200円

\*<sup>1</sup> 保育料として施設拡充費や維持費等を徴収している。任意での寄付金の徴収は含めていない。

\*<sup>2</sup> 公立園は家庭の住民税に応じた保育料が設定されているため、各家庭によって保育料が異なる。上限が月7,600円であり生活保護家庭は無料である。表では上限を記載した。

幼稚園の概要と次に示すインタビュー調査の内容から個人の特定を避けるため、幼稚園をグループに分けた。グループAは幼児教室である。富裕層が多く居住している地域にあるため、私立幼稚園、私立小学校の入試を視野に入れて通わせている保護者が多い。教育に関しての関心は高く、さまざまな幼児教室を見学し、この教室を選び、0歳から通わせている保護者もいる。

グループBは幼稚園から大学院、または高等学校までの一貫校の附属幼稚園である。B1の幼稚園は附属の小学校への進学率が90%以上であり、上級学校への進学を目的として入園させる保護者が多い。しかし、B2の幼稚園は附属小学校に進学する家庭は約50%である。幼稚園選択の理由は、幼稚園自体の教育を評価し選択している保護者が多い。上級学校への進学を重視するのではなく、保育料は高額であり遠方であっても、この幼稚園で教育を受けさせたいと強く願う保護者が選択している。

グループCはそれ以外の私立幼稚園である。居住している市内にあるいわゆる「普通」の幼稚園であり、私立の小学校への進学を考えている保護者は少ない。

Dグループは公立幼稚園である。Dグループの幼稚園は公立であり保育料が安いために、さまざまな階層の保護者がいた。しかし、この幼稚園は多くの保護者から教育内容が優れていると評価されている。そのため、あえてこの園を選択し遠方から通ってくる保護者もいた。しかし、私立の小学校への進学を考えている保護者はいなかった。

このように、幼稚園選択においても、保護者の経済資本、教育観が大きく反映されている。

### 2.3 インタビュー調査の概要

インタビュー調査の対象者は、事前のアンケート調査に、子どもの家庭における日常生活、幼稚園選択に関するインタビューを実施することを記し、協力者を募った。その後、調査者の意思により申し出があった者にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査への同意が得られた数は、全体で67名であり、そのうち14名にインタビュー調査を実施した。本研究ではそのうちの2人のインタビュー調査の結果を主な検討の対象とする。

インタビュー調査は半構造化面接で行った。質問項目<sup>5)</sup>以外の内容についても必要に応じて話してもらった。インタビュー調査の時間は、約30分から1時間30分であり、実施期間は2017年3月から6月である。了承を得て録音したものをすべて文章化した。インタビュー調査を行った場所は、喫茶店または幼児教室で

あった。

本稿で取り上げる2例は、AグループとBグループの幼稚園に通わせている保護者である。2例とも、高額な保育料を支払い、しかも遠方から通っている。そこには、保護者の明確な目的・戦略があり、この施設を選択していることがわかる。本稿では、2つのケースの詳細を検討しつつ、その選択における動機と母親の子育て意識と関連について考察していく。

### 3. 「実母の子育て」に理想を見出す子育て ——田中さん（仮名）のケース

田中さんはBグループの幼稚園の保護者であるが、附属の小学校への進学が幼稚園選択の理由ではなかった。子どもの教育に関しては、独特の価値観をもち、自らの子育て観を理路整然と語れる人であった。他の保護者とは一線を画し、与しようとしな。自らを、他の母親とは違う「特殊な母親」であることを強調していた。同調できない環境をなぜ選択したのか、そこに田中さんの独特の選択の基準があるのではないかと考え、検討の対象とした。

#### 3.1 家族の背景

田中さんの年齢は41歳、夫の年齢は44歳である。子どもは9歳(小学3年)の長女、7歳(小学1年)の次女、4歳(年中)の三女の3人である。アンケート調査の記載事項では、家族の総収入は、600万円～800万円である。夫婦ともに大学を卒業している。現在は、神奈川県に在住、田中さんの両親、妹(幼稚園教諭)と同居している。

田中さんは、九州地方で生まれた。カトリック信者の両親の下で4人兄弟の長女として育つ。幼稚園ではモンテッソーリ教育、カトリック教育を受け、小学校から高等学校まで公立学校に通う。大学は東京の看護学科に進学し、卒業後は看護師として働いていた。

その後結婚し、夫の転勤のため中東で8年間暮らし、3人の子どもを出産する。専業主婦として子育てに専念し、一昨年に帰国した。中東では近所に遊ばせる場所がないため、早くから幼稚園に入園させる人が多いという慣習に倣い、田中さんも、子ども3人を2歳からモンテッソーリ教育、レジヨ・エミリア・アブローチの幼稚園に入園させる。そこで子どもたちは、アラビア語、ドイツ語、英語を習得した。中東での幼稚園は多種多様な人種の人々がおり、いろいろな文化が共存し、またさまざまな個性(障害を含めて)の子どもたちをみんなが受け入れて生活をしてきた。そして、長女が2歳、次女が生後3か月のときに中東の「アラブの春」を経験する。突然クーデターが起き、2人の幼子の命が危機にさらされたとき、この命の他に大切なものは何もないと実感したという。その「特殊な経験」があるので、日本のお母さんのように右往左往しない。自分たちは「おれない」子育ての指針があると語り、それが田中さん夫婦にとっての子育て観を規定している大きな要因である。帰国後は、田中さんの両親と幼稚園教諭である妹と同居している。現在、次女、三女はモンテッソーリ教育、カトリック教育を教育理念とする幼稚園に通わせている。長女は公立小学校に通っている。また、田中さんは実母との関係が濃密である。実母の子育て観の影響が強く、インタビュー時に何度も「母のような母親になりたい」と語っていた。現在は専業主婦として子育てに専念している。

#### 3.2 理想とする母親像

田中さんにとっての理想とする母親像は実母である。子どもたちに何かあったときにすぐに動ける母親、助けてあげられる母親を理想としていた。そのために、現在、田中さんはキャリアを捨て専業主婦に徹している。わが子の教育においても、実母が自分に受けさせた幼児教育と同様の選択をしている。幼稚園の選択の基準は、カトリック教育とモンテッソーリ教育である。そのために、「自分たちには身分不相応」と言いながら、自宅から電車、バスを乗り継ぎ通園しなければならない、教育費も高額な幼稚園を選んだ。モンテッ

ソーリ教育、カトリック信仰には普遍性があると語る。しかし、そのこだわりは幼稚園だけに留まる。長女の小学校の選択は、近所の公立小学校であった。理由は、自分も夫も公立であったこと、「近所に遊ぶ友だちがいた方が良くから」また、経済的な負担が大きいことが主な要因であった。

また、自身の今後のライフコースに関しての質問においても、「私は、今時の女性ではないので、まず、職場復帰する気はないんです。何かシフトに入ってしまうと、子ども3人いて、何かあった時にすぐ動いていうことができないし、娘たちなので結婚して、子どもができたときに、人手がいることを私自身痛感しているので、何か助けてほしいと言われたときにすぐ動ける人でありたいと思っています。母がそうしてくれたように、私も娘にそうしたいと思っています。それは現代において、時代遅れのように見えるかもしれないけど、母のような母親になりたいんです」と語る。自分のキャリアより、子どもが助けを求める時すぐに対処できる母親、何より子ども優先に考える母親が田中さんにとっての理想の母親像であり、「完璧」に実母の子育て観を踏襲することを理想と考えている。女性の社会進出が進む時代において、田中さんは、自分の能力を生かすことを視野に入れず、子育てだけに生きている。田中さんは、そのことによって苦しみを感じてはいないのだろうか。

### 3.3 実母の子育てを踏襲するという子育て観

田中さんの子育て観は、実母からの影響が大きく、実母の子育て観・育児行為を踏襲することであった。そうすることが、自分の母親役割を全うする術であると考えていた。「母の教えというか母の言うことは正しいかなと思って、なるべく母に相談することにしていきます」と語る。また、幼い時から実母は「常に母親程大事な仕事はないって言われて育ててきて、いろんな仕事はあるけれど、それは代わりができる仕事だけど、母親だけは代わりができないんだよって言われて、だから私はあなたにするんだよ、必要な時はいつでもいるのよって」と幼い頃から常に田中さんを含む4人の子どもたちに語っていたという。実母は、母親として一番大切な使命は子どもを育てることであると伝えていた。

実母はその言葉の通り献身的に子どもである田中さんたちに尽くしていた。「私が、中東でつわりで苦しんでいる時にも来てくれたし、里帰り出産をして子どもを連れて中東に帰る時も一緒に飛行機に乗ってくれたし、そうしてもらったので、大変な時に夫と二人きりでは乗り切れなかった時に、母が来てくれたので、私も3人(自分の子ども)にはそうしてあげたいと思うんです」と語る。

教育に関しても「決して裕福な家庭ではなかったのですが、子どもたち4人にモンテッソーリ教育を受けさせてくれました。大学もみんな東京に出してくれて、最後の子が東京に出る時に両親も東京にきたんです」と語る。実母は、経済的に困窮していても子どもには、良い教育を受けさせたいと考え、子どもたちのことだけを考え子育てをしてきたと語る。

また、田中さんは実母の教えは正しいと断定し、自分の子育て観と相違がある幼稚園の保護者に対して、強く批判をしていた。例えば、子どもを預かり保育に預け働く母親や、幼稚園降園後に数々のおけいごごとに子どもを通わせる母親、小学校低学年から、中学校受験を目指し塾に通わせる母親たちに対してである。母親が就労すること、数々のおけいごごとに通わせることによって、親子の過ごす時間が減少し絆が結べないと母役割の重要性を力説する。「そういう人たちが子どもを育てると、その親子関係はつながらないんだらうなって思います。自分の母親とつながれてない人が自分の子どもとどうつながっていくんだらうって。自分の育てている家庭は母親の家庭があって、なぜそこが切れるのかが私にはわかりません。だから、すごく(私は)特殊なんだと思います」と語る。イデオロギーとしての「母性愛神話」を疑うことなく、「母の教えは正しい」と忠実に実行することが、田中さんの子育て観、「完璧」な母親像と規定している。

成人に達してからも田中さんに対する実母の関与は強い。現在は同居しているため、確信が持てない、さまざまな情報に対してもその見解を実母に話し価値観を共有している。実母の存在が田中さんの精神的な模範であり支えとなっている。

### 3.4 実母からの承認が自分の子育ての目標

現在、田中さんは、実母と日常的に価値観を共有し一致させている。実母の「母性愛」イデオロギーの思考を自ら理想の母親像として受け継ぎ、実行することで安定を得ようとしている。実母こそ「完璧」な母親であると考え、看護師としての職業選択をせず、実母と同じ専業主婦に専念しているように見える。ゆえに、自分を「時代にそぐわない母親」と語り他人と差異化し、自分の子育ての「納得」を得ようとしている。

このように、田中さんは、自分自身との葛藤のなかで、実母の子育てを「完璧」に踏襲することで自分も理想の母親になれると考えているのではないだろうか。田中さんは、自身との葛藤のなかで安定した自己評価ができないために、子育ての目標を、実母からの承認と評価に置いている。

## 4. 「より完璧に、後悔しない子育て」を目指す母親 —— 森田さん（仮名）のケース

森田さんは、子どもをAグループの幼児教室に通わせている。森田さんは、1歳2か月の子どもと電車とバスを乗り継ぎ、1時間かけて教室に通っている。親子ともきちんとした服装で、教育熱心な母親という印象であった。森田さんは、仕事を持ちながらも、何よりも子育てを重視している母親であることから、検討の対象者とした。

### 4.1 家族の背景

森田さんの年齢はインタビュー調査時、42歳であり、夫は44歳である。最終学歴は、両親ともに大学を卒業している。子どもは長女（1歳2か月）の1人である。家族の総収入は事前に実施したアンケート調査の記載によれば、1,500～2,000万円である。

森田さんは関東地方の出身である。小学校から高等学校まで地元の公立校に進学、大学は東京にある音楽大学に進学し声楽を学び中高の音楽の教員免許を取得する。27歳でイベント会社を起業し、現在、取締役社長として、月3日出社している。結婚後、長女を出産する。長女を出産後は、仕事を調整し子育てを第一に考えている。

夫も地方の出身であり、高等学校までは地元の公立校に通い大学は東京にある私学に進学している。森田さんは、子どもが生後6か月の頃、子どものしつけに悩むようになった。出版社勤務の友人に相談し、モンテッソーリ教育の著作を紹介される。数冊読んだ後、子どもにモンテッソーリ教育を受けさせたいと考え、子どもが生後8か月から現在の教室に通うようになった。現在は、モンテッソーリ教室に週2回、他に2つの音楽教室に通わせている。子どもの幼稚園の選択は、高校までの一貫校の有名私立幼稚園を強く希望している。そのために、子どもが1歳児の時点からさまざまな幼稚園の説明会等に参加し情報収集を行っている。

### 4.2 森田さんの子育て観 —— 「より完璧に、後悔しない子育て」

森田さんは、子育てに関して「より完璧に。後悔したくない。私が知っていればこうできたのと思うのが嫌です」と語る。自分が知らないことを「無知」と表現し、それによって、子どものしつけの方法を間違えることを恐れていた。その理由として「自分のことじゃないからなおさら。より完璧に、より良くと思う。自分のことだったら、どうにか収拾を効かせるようには。自分ではないので。大切な時期であるからということもありますし。すごく責任を感じるというか」という。子育てに対して重圧を感じ、その結果、自分のできる精一杯のことをしたいと考えていると語る。

森田さんは、1歳2か月の子どもの幼稚園選択についても、深い関心を示していた。「いろいろ調べて、知れば知るほど、より良い教育、質の教育は私学しかないと思っています」と語る。また、「1つでも偏差値の高い幼稚園に入園させたい」と語っていた。1歳2か月の我が子の習いごとについては、「習いごとってというのは好きなことを自分で見つけてほしい。そのために、環境を整える。もちろん、子どもの環境

を整えます。今後は、絵に興味を示していると感じる前に、美術館に連れて行きます」と語る。森田さんが、懸命に子育てをしようと考えている様子がわかる。森田さんにこれからのライフプランを聞くと、「やっぱりフルタイムの仕事だと、見過ごしてしまうこととか、手を抜くってということもあると思うので」とフルタイムでの就労は考えていないという。子どもの変化を見過ごさない、手を抜かない完璧な子育てを目指していた。

筆者は、インタビュー調査の前にモンテッソーリ教室での森田さん親子の様子を見学した。森田さんの姿から、子どもに対する「評価」を強く感じた。森田さんは、子どもができたことに関して、無表情で過度に褒める行為がしばしば見られた。できないことに関しては、付ききりで援助し子どもができるようになるまで何度も何度も続けさせていた。子どもが、自分のやりたい教具を選択することはなかった。子どもは、母親に言われるがまま、抵抗もせず、無表情で繰り返し続けていた。やっとできたとき、「できた」と褒められても子どもは笑顔を見せなかった。その行動は1時間続いた。1時間のレッスンのあいだ、子どもは一度も言葉を発することも、笑顔も見せることはなかった。レッスン後は、子どもの最近の成長を教師と確認し帰っていった。常に、子どもの行動が「評価」の対象となっていた。

これらの行動に、森田さんが目指す「完璧さ」が現れているように思われる。

#### 4.3 子育てと情報

森田さんの「完璧な子育て、後悔しない子育て」の方法は、子育てに関する情報をインターネット、本、友人、教室の教師等から収集し、できる限りその通りに行うことである。例えば「今の時期、〇〇のことに興味を示す」との情報を得ると、その情報の通りに子どもが興味を示さないと不安になり、じっと子どもの様子を観察する。「自分の無知のせいで後悔は絶対したくなかったのでそういうので不安で」と語る。1週間後に、子どもが興味を示すとほっとする。また、森田さんは、「すぐ、知りたいことはネットで検索する」と語る。また「子どもが頭をよくガンガンとぶつける時に、すごく心配になっちゃう時にまずはネットで調べて、そのあと、本を見たり、とか。まず、はじめにバツと調べちゃうって感じかもしれない」という。目の前の子どもの行動が理解できない時、子どもの気持ちや心に寄り添い安心させるのではなく、インターネット検索によってその原因を探る。すぐに答えを知りたい、「正しい」答えを知りたいと考えるゆえの行動が常態化している。そして「良いと書かれていることはなるべくやるようにしています」と語る。

幼稚園選択においても、自分の希望する選択肢から情報を絞り、幼稚園を選んでいった。森田さんは、その他の情報に関しても、インターネットの情報に偏る傾向がある。

森田さんは、田中さんと異なり母親像に依拠しているわけではない。そのためにインターネット情報を重視しているのではないだろうか。しかし、インターネットの情報は、情報源が不確かなものも多く含まれている。また、その情報の選択は個人の判断や価値観に委ねられている。

森田さんは、多数の情報の中から自分の価値観と合うものだけを選択しているのではないだろうか。そして、そのことだけを集中的に盲目的に信じ、子育てを行っているように見える。選ぶ情報が単一でないがゆえに、自分の都合に合わせ、確固とした軸がないために混乱する状態を招いている。目の前の子どもの姿に真剣に対峙するのではなく、不確かで多様なインターネット情報からおもむろに答えを見出している。

#### 4.4 「今ある姿」と「あるべき姿」の不一致を埋める選択と評価

森田さんの子育ての方法を聞いてみると、「完璧な子育て、後悔しない子育て」の根底には、常に他者からの評価があるように思われる。その他者は、特定の人ではなく漠然とした一般的な人、世間的な見方による評価である。「誰が考える完璧なのか、誰が後悔しないのか」と考えると、その主体は子どもではなく、森田さん自身である。子育てに関する重圧も、子どもに良いと言われていることをしているという発言からも、周囲の目が気になり、自分に悪い評価が向かないようにより良い子育て行動を選択しようと懸命になっているように見える。今の自分の子育てに自信がなく、満足できないがためにさまざまな情報を収集する。

自分が向かっている不鮮明な「完璧な子育て」と、今の自分の子育ての間の乖離を埋め合わせるために懸命に行動していると語っているのではないだろうか。幼稚園入園の情報に関しても、ひたすら私学にこだわる。受け止める基準は外からの評価であり、自分自身の内に確固とした価値観がないためにますます外からの評価が気になる。そして、自分自身の内なる思いがないために不安に駆られ、情報に振り回されるというループのなかにはいるのではないだろうか。社会で何らかの成功を収めている森田さんは、上昇志向が強い。それゆえ、自分の努力によって、「今ある姿」から母親として今以上の「あるべき姿」を目指している。その不一致を埋めるための多様な選択と評価のはざままで苦しんでいるようにも見える。

#### 4.5 まとめ

2つのケースから母親自身の強い承認欲求があることがわかる。田中さんは、実母からの承認であり、森田さんは、一般的な世間からの承認である。自分自身の自己肯定感が希薄なために、子育ての不安を解消するために他者からの承認を求めているように思える。

しかし、このような例はこの2人の特殊な問題ではない。他の調査対象者の語りからも、形は異なるが同様の問題があった。例えば、子どもが通っている幼稚園の保育内容や子どもの能力を他と比較することで子育てのあり方を規定し、その不足を懸命に補っている母親がいた。形やそこに起きている問題は異なるが、子どもの姿を直視せず、外部に自分の理想像を描き、自分や子どもをその理想像と一致させるために懸命になっていた。それらの対象者が語れば語るほど、その人が困惑している状況が表面化してきた。そして、その状況を自身が意識していないことも共通していた。

## 5. 分析と考察

### 5.1 目標と子育て

本稿で扱った2例の母親には共通の姿がある。それは、自分が選択した価値観に沿った「完璧」な子育てに従って邁進する姿である。しかし、母親自身はそれに気が付いていない。自分の外部にある基準に合わせて自分を納得させ、苦しみを感じていても目を背けている状況ではないだろうか。

田中さんは、「母の教えというか、母の言うことは正しいかなと思って、なるべく母に相談することになっています」と語るように、実母の子育て観、社会観に依拠し子育てを行っていた。田中さんにとっての「完璧」は、実母の子育てを踏襲することであった。実母の子育てを踏襲することによって「私は、現代にそぐわない特殊な人だから」と自分を差別化し、他人と距離を置くことで安定を得ている。正しい実母の子育てを踏襲している私は正しい母親であり、ぶれることはない。他のママ友とは違い安定していることを語っていた。

森田さんの子育ての特徴は、インターネット等の多様な情報を収集し、それに依拠し子育てを行っていたことであった。そこに「理想」を求めていた。それらの情報を自分の狭い価値観に合わせて選択し、自分の求める子どもの像をつくり出していた。「だいたい良いて言われていることはだいたい良いし、良いて書かれている。インターネットに書いてあってやっていなかったなあということはなるべくやっています」と語るように、インターネットの情報が自分の「完璧な子育て、後悔しない子育て」の基準であり、情報に沿って「完璧」に子育てをすることを目指していた。自分の行動が「完璧」を目指しているのである。収集した情報が正確なものであるのか、その根拠はどこにあるのか等への関心はなく、自分の生活や状況に合っているものであれば取り入れていた。インターネットという情報源のみに頼ることは、効率よく多様な意見を収集することができると考えている。

先に述べたように、広田(1999)のいう「パーフェクト・マザー」は、子どもに身に付けさせる教育の内容において「パーフェクト」なものを望む母親の姿である。また、本田(2005)は、学歴の高い母親ほど、「きっちり」した子育てと「のびのび」した子育ての両方に力を入れていると述べ、広田のいう「学力も人格も」

という全方位型の教育感を持っているという。「きっちり」「のびのび」は、母親が行う子育ての内容であった。

しかし、本研究の2つのケースにおける「完璧」の意味は、広田や本田の言う内容とは質が異なっているのではないだろうか。本研究の2つのケースにおける「完璧」は、子育ての内容ではなく、子育ての方法であり母親自身の目標を意味していた。森田さんや田中さんの「完璧」の目標は明確であり、一言で表現することができるものである。それは、依拠していることが抽象化されているからである。田中さんは実母であり森田さんは情報である。目標を、自分の内から見出すのではなく、子どもの姿から見出すのではなく、目標を外部から持ち込み、それに依拠してそれに向かって邁進する。これは、母親の子育て志向の抽象化が高まっていることを意味しているのではないだろうか。子どものことを考え、懸命に行っている子育てであるが、そこに母親自身も自覚していないこだわりがある。他者を排除し、自分の世界に閉じこもり、不安を抱えているが不安を回避するために「完璧」に走る苦しさが見えてくる。

## 5.2 不安がかりたてる「熱心」さ

森田さんは、本人も自覚していない混沌とした不安を抱えていた。森田さんは「教育がわからない」という。森田さんのいう「教育」とは、子どもの発達であり、しつけであり、学校選択等、子育て全般を指していた。そのわからない不安を埋めるために情報収集をしていた。また、田中さんも同様の不安を抱えていた。田中さんは8年間、海外に赴任していたため、現在の身近な母親の子育て観や学校選択に疑問を呈し、子どもたちの将来への不安を語っていた。この不安は、何に起因するものなのだろうか。

その不安について考察する際に有効であると思われるのは、先の渋谷の指摘である。プチブル階級は、何が「本物」か、を知らないということに起因する。「本物」の文化を手にすることができれば、自分自身も「本物」になれると考えている。しかし、彼らは何が「本物」の文化であるのかを知ることができないので、彼らは常に不安に苛まれているという。このような状況の中にミドルクラスは置かれており、その結果、ミドルクラスに矛盾が集中すると渋谷は述べている。

このような渋谷の述べる「プチブルの不安」が森田さんのケースと重なるのではないだろうか。森田さんは地方出身であることもあり、幼稚園受験等、都市部の私立学校や進学に関する体験による知識がない。知らないがゆえに、自分自身に自信がない。しかし、上昇志向が強く、「子どもを1つでも偏差値の高い幼稚園に入園させたい」と語り、「良い教育は私学に通わせること」であると確信している。高い偏差値、私学と単純に目標を決め、努力する方向を1つに絞って突き進む。不安があるから自分が「完璧」に行くことに邁進する。邁進した結果の子ども能力、その結果を導いた自分への「評価」を期待している。「評価」は子どもへの評価であると同時に、母親自身の評価である。そのことを通して、自己の承認欲求を満たそうとしているのではないだろうか。

かつては、このような母親の行動は「代理競争」と表現された。母親自身が自分の人生の目的を見出せず、それを隠蔽するために、「いい子」育てに邁進するという意味であった。しかし、森田さんの場合は、「代理競争」ではなく、母親自身の存在論的な欲求となっているのではないだろうか。母親自身の存在を肯定するための子育てとなっている。森田さんは自分自身ではなく、子育てに自分の存在の意味を問うているのではないだろうか。

一方の田中さんも、森田さんと同様に「プチブルの不安」を抱えている。地方の出身であり、海外赴任の経験から現代の日本の教育事情の知識が少ない。そのために自信が持てない。しかし、近い将来に夫の仕事により海外赴任が予想されることや実母の子育て観を踏襲することで、不安を回避していた。田中さんは「プチブルの不安」が強いために実母を「完璧」な母親と考え、語らせていたのではないだろうか。

## 5.3 子育てに求められる能力

森田さんと田中さんは、社会的には有能な人材である。森田さんは、会社を経営する代表取締役社長であり、田中さんも、結婚前は看護師養成の研究に携わっていた人である。なぜ、有能な人がこのように子育て

に不安を抱え、苦しんでいるのだろうか。

現代では、女性が社会に進出し、資本主義社会で働くことにより、子育てに新たな価値観が持ち込まれた。

原田（2007）は、「行動完了の意志」が強く、「行動生起での自信」が強い母親は、学齢期や会社社会では有能な母親であるが、そのような母親は、子育てには不向きな人格であると述べている。

本研究の2つのケースの母親は、「行動を完了しようとする意志」が強く、「行動生起における自信」がある人であった。力もあり経済資本もある。だから自分の決めた子育てに邁進できる。邁進することに問題があるとは気付かず、自分が納得するまで邁進する。では、なぜそこまで邁進するのだろうか。

そもそも、社会が求めている能力と子育てに必要な能力とが異なることの認識がされていない。また、社会で懸命に働き有能感や効力感をそのまま子育てに応用すること自体が間違いだということに気づいていない。仕事で懸命に努力し「完璧」を目指し、ある程度の成功を手にした方法と同様に子育てにおいても、懸命に努力しさえすれば、今の自分を超越する子どもに育つであろうと考え、社会で学んだ効率や細部にこだわり落ち度のない方法を見出せば、誰からも称賛される子育てができると考えているのではないだろうか。

また、森田さんは社会で「がんばって」働いて、ある一定の地位を築いている。高橋（2016）は母性役割と父性役割がうまく機能していないと、子どもは安心を獲得できないことから「がんばり」はうまく伝達されず、父親が教える「がんばり」は、失敗を許さないルールになってしまって子どもはいつも緊張と不安に追い立てられるという。社会において活躍し地位を得ている森田さんは、母性的な要素より父性的な要素が無意識のうちに子育てに対する思考・方法に表面化しているのではないだろうか。父性役割の「がんばる」がうまく伝達されていないために、自身も子どもも不安を抱えている状態に陥っているように見える。また、内田（2014）は親の価値観が異なることにより、子どもは「息の付ける隙間」があり、その隙間によって健全に育つと述べていた。しかし、森田さんのケースは、社会で働いている母親と父親の価値観は単一であり、閉塞された家庭内の価値観は単一となっている。そのために、その単一の価値観が1つの目標に邁進する原動力となっている。森田さんや田中さんの「不安」は、資本主義社会の構造が色濃く影響しているものであると思われる。

## おわりに

本稿は、ミドルクラスの子育てについて2つのケースを取り上げ検討した。2つのケース共に自分の「完璧」に従って懸命に子育てをしていた。そして、その「懸命さ」の裏に苦しさを抱えていることが垣間見えた。なぜ、「完璧」なのか。そう考える母親の志向がどのように形成されてきたのかを検討した。

2人共に、「完璧」には、それぞれの目標があった。森田さんは、現在の自分のありのままの姿ではない「あるべき姿」に向かったの「完璧」であり、田中さんは実母の子育て観の踏襲が「完璧」の目標であった。それらの目標の「選択」は、目の前の子どもと対峙し親として子どもにとって何がよい方向なのかを模索し得た目標ではなく、自分の外部から自分の承認を得るため、納得するための目標であり「選択」であった。そして「選択」は自分を満足させる価値観のみに委ねられていた。

また、2人は自分の子育てにおける承認欲求が強く、「評価」を強く求めていた。森田さんは漠然とした世間や他人からの評価であり、田中さんは実母からの評価であった。また、その評価は子どもへの「評価」ではなく自分自身への「評価」であり、自己肯定感が希薄であるための承認欲求の表れでもあった。そして、自己の承認欲求を満たすために「完璧」に邁進していた。しかし、その自分が抱えている課題に気が付かないために、混沌とした不安・苦しみを抱えていた。よって、ここまで「完璧」が母親たちを苦しめていたのではないだろうか。

また、子育てにおける不安の要因には、以前とは異なる要因があった。それは、子育てに資本主義社会の構造が色濃く影響を及ぼしているということである。有能な母親は、社会で身に付けた能力を子育てに応用

している。社会において有能であるための能力と子育てに必要な能力とは異質なものであることを理解できず、社会において有能な自分を自己肯定するかのようによく子育てにおいても「完璧」に向かって力いっぱい邁進していた。その結果、母親が父性機能を担うことになり、母性機能が正常に機能することがない。本研究の2つの事例においても、父親の姿が語られることは少なく、多忙を極める父親は母親の意見に同調するだけにとどまり、家庭における父性不在が感じられた。成長する子どもにとって、母親の志向・行動のすべてが不安の材料となっていくのである。

このように、本研究の2つのケースは、一見すると「実母の子育てに固執する保守的な子育て」であり、もう一方は「子育てに資本主義社会での価値観や効率性を求める進歩的な子育て」のように見える。しかし、2つのケースの根底にある子育ての志向は同一のものである。

このようなミドルクラスの母親に強く表れている不安は、格差社会の問題においては個人的な問題と言われることが多い。しかし、本稿で検討してきた資本主義社会の構造がミドルクラスの母親に与える漠然とした不安は母親のみの問題ではなく、幼い子どもにも大きな影響を与える。その子どもへの影響を考えると、個人的な問題として看過することはできないのではないだろうか。この現実を認識することによって、新たな子育て支援のあり方を見出していきたいと考える。

## 付記

本稿は、2017年横浜国立大学教育研究科修士論文の内容をもとにして、再分析、再構成した。

## 注

- 1) ピエール・ブルデューは、『ディスタンクシオン』において、階層社会のフランスを構成する、ブルジョア（支配）階級、プチブル（中間）階級、庶民（労働者）階級の3つの階級の姿を実証的に描いた。彼は、階級を経済的な指標（経済資本）、文化的な次元（文化資本）、社会関係（社会関係資本）によって規定されることを示した。
- 2) ベネッセコーポレーション（2015）の調査では、子どもを幼稚園に通わせている母親は、専業主婦（65.7%）、常勤（8.6%）、パートタイム（22.9%）、フリー（1.5%）、育休中（0.6%）、未記入（0.6%）であり、専業主婦が多いことがわかる。
- 3) 倫理的配慮について：本研究に当たっては、インタビュー前に対象者に口頭及び文書により研究趣旨の説明を行い、全員から同意を得た。
- 4) アンケート調査の主な項目は、以下のとおりである。①フェイスシート：子どもの性別、年齢、同居している家族構成、子どもの父親・母親の年齢、最終学歴、職業、勤務状況、世帯全体の収入について。②家族の生活の実態について：父母の子育てのかかわり方、家事・育児の分担、父母の余暇活動。子どもの教育について：子ども幼稚園選択、習いごとの利用、教育にかかる費用、子どもの学歴希望、子育ての情報。回答方法は、選択式と自由記述を併用した。
- 5) インタビュー調査では主に、父母の子育てのかかわり方、家事や育児の分担、父母の余暇活動の過ごし方、幼稚園の選択や習いごとの利用や教育にかかる費用、子どもの学歴希望、父母の出身家庭、自らの学校教育経験や職業経験について、母親の将来の展望と悩みについて質問した。

## 引用文献・参考文献

- 内田樹、『街場の共同体論』、東京、潮出版社、2014  
押川剛、『子供の死を祈る親たち』、東京、新潮社、2017  
荻谷剛彦、『学力と階層』、東京、朝日新聞出版、2012  
汐見稔幸、『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』東京、主婦の友社、2008、pp.23-28

- 渋谷望, 『ミドルクラスを問いなおす——格差社会の盲点』, 東京, NHK 出版, 2010, pp.57-59
- 高橋和己, 『「母と子」という病』, 東京, 筑摩書房, 2016
- 天童睦子, 『育児戦略の社会学——育児雑誌の変容と再生産』 京都, 世界思想社, 2004, p.137-138
- 天童睦子, 『育児戦略の社会学——家族・ジェンダー・再生産』 京都, 世界思想社, 2016
- 広田照幸, 『リーディングス日本の教育と社会 第3巻 子育て・しつけ』, 東京, 日本図書センター, 2007, pp.129-131
- 広田照幸, 『日本人のしつけは衰退したか』, 東京, 講談社, 1999, pp.122-123
- 原田正文, 『子育ての変貌と次世代育成支援』, 愛知, 名古屋大学出版会, 2006, pp.119
- 細辻恵子, 『揺らぐ社会の女性と子ども 文化社会学的考察』, 京都, 世界思想社, 2005, pp.57
- 本田由紀, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』, 勁草社, 東京, 2008, pp.165-176
- ブルデュー, 『ディクタシオンⅡ』, 東京, 藤原書店, 1990
- ベネッセコーポレーション調査, “研究所報 37 第 5 回用事の生活アンケート報告書・調査テーマ乳幼児の生活の様子, 保護者の子育てに関する意識と実態”, 入手先 (<<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4949>>), (参照 2017-7-27)
- 耳塚寛明, 『学力格差に挑む (お茶の水女子大学グローバル COE プログラム格差センシティブな人間発達科学の構造)』 東京, 金子書房, 2013
- 三好邦雄, 『「まじめな親」の子どもが危ない』, 東京, 飛鳥新社, 1999
- 宮島喬, 『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』, 東京, 藤原書店, 2017

